

ぼくのテントウムシ

愛媛大学教育学部附属幼稚園（愛媛県松山市）

[4歳児]

「ぼくが捕ったよ」

隣接する小学校の敷地にある小高い丘“ズッコケランド”に度々探検に出かけている。丘を駆け回ったり草花を摘んだりしている中で、A児を含む4人はテントウムシ探しをするようになる。

5月当初はテントウムシを捕まえられず、保育者に頼っていたが、その後3日目になると、A児はテントウムシ捕りの得意なB児の側で探し、テントウムシを見付ける。B児に「(葉っぱから)落ちないようにそうっと捕って」と教えてもらい、A児は両手でそうっと下からすくい上げるようにテントウムシを捕る。「Aちゃんが捕ったよ」と得意そうに言う。



テントウムシの家

B児が「テントウムシの家発見！みんなおいで」と呼びかけると、ヨモギの葉にテントウムシが4匹いて、A児は2匹を捕る。B児に葉も入れなければいけないと教わり、A児はヨモギの葉を飼育ケースに入れる。保育者に「いいお家になったね」と声をかけられ「うん」とA児は返事をする。B児からテントウムシはアブラムシを食べるので、アブラムシを入れることを教わり、B児にアブラムシのいる場所も教わって、たくさん付いている草をケースに入れる。「Aちゃんが捕ったよ」と、A児は得意そうに保育者に見せる。

テントウムシ飛ばよ！

捕まえることができた翌日、A児は「テントウムシ時々飛ばよ。この中で飛んだよ」と保育者に話す。保育者がどんな風に飛ばぬのか尋ねると、「羽が出て飛ばんよ。ぼくのテントウムシ飛んだよ」と、A児は得意そうに答える。

葉っぱとアブラムシが好きなんよ

テントウムシ探しをしているA児は、テントウムシだけを飼育ケースに入れていたC児に「テントウムシは葉っぱとアブラムシが好きなんよ。アブラムシは黄緑よ。ここで捕ったんよ」と教える。D児が「♪テントウムシのご飯はアブラムシよー アブラムシがおる所にテントウムシがおるんよー ご飯じゃから♪」と即興で歌うと、A児も真似て歌いながらテントウムシを探す。

<その後の姿>

- ・C児が飼育ケースのテントウムシをよく見て、「いろいろな洋服を着ている」と、模様が違うことに気付く。そして、A児がC児の虫と比べて「ぼくのと違う」と言うと、B児がA児の虫は“サナホシテントウムシ”だと言う。すると、黒字に赤い模様のC児のテントウムシは何だろうということになり、テントウムシの本で調べると、“サミテントウムシ”だとわかる。
- ・B児がテントウムシのサナギを見付け「これ、テントウムシのサナギ。皮を脱いで大きくなるんだよ」と言うと、A児が「ザリガニとおんなじや」と言う。B児が説明をしながら葉っぱごとそっと捕って、テープでケースに貼っていく様子を、A児はじっと見る。その3日後、A児はサナギを見付け、B児がしていたようにサナギの付いている葉をテープでケースに止める。「サナギは動かんのよ、もうすぐテントウムシになるんよ」と保育者に話す。
- ・テントウムシ捕りの仲間に入ったF児に、A児は自分が見付けたらF児にあげることや、テントウムシが飛んだり臭い液を出したりする話をし、“テントウムシの家”と呼んでいる場所に案内する。
- ・2週間余り夢中になっていたA児は、サナギがテントウムシになった時に飼っていたテントウムシと一緒に全部逃したことを保育者に話す。



みどころ

自ら心を動かしてテントウムシへの興味を深めているA児は、虫とのかかわりのモデルになる友達のB児との虫探しを体験することで、様々な学びをしています。そしてA児は、自ら学び獲得したことを友達に伝えていくだけでなく、満足するまで遊ぶことで自分から遊びを収束することができました。このように、自然とのかかわり方や興味の対象を知る喜びを体験できる環境や遊びを保障することにより、保育者は幼児同士で学び合い「科学する心」が育まれる過程を把握することができました。